

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

13 男たちが雄々しくみえた日

第十三日め（三月二十八日）

いよいよ本日、ウマのたてがみ切り。晴れたおだやかな一日になりそうである。

昨夜、放牧をおえてやってきたバータルに、ウジチャは「明朝はやくこい」と指示していた。何時とはいわず、何時とも決めない。午前四時ころバータルは来訪したらしい。午前七時に二人の姿が遠くのみえたとき、すでに二人はこちらへ向かっていた。馬群に出向いて、こちらへ追ってきたあとらしい。馬群はまだみえないが、南方のすぐそこにいるという。

午前八時。ヒツジ・ヤギたちが放牧に出発する時間。群れをすこし西のほうへ移動させる。羊人ソヨルトは、群れのなかで昨夜のうちに誕生した子をひろう。三匹の子ヒツジをまとめてだいて、あとずさりしてあるく。母ヒツジにみせながら、石垣までおびきよせる。母ヒツジたちは鼻をならして石垣のなかにいる。いずれも子をしっかり認知する、よい母らしい。問題はなさそうである。群れは全体に移動しつづけている。まもなく羊人ソヨルトは騎乗して、群れを北へとみちびいた。

午前十時頃、ゆるやかになみうつ地平線のかなたに、騎乗姿がゆれはじめた。ウマのりかたは人によって微妙に異なる。だから、騎乗姿のゆれかたで、彼らは誰であるかをたがいに遠くから認知できるという。南東の丘をこえて近づいてくるシルエットは、ウジチャの親戚。北の丘をこえて近づくのは、

ウジチャのおさななじみ。地平線にゆれる騎乗姿が、一つまた一つとふえる。西方からは多くの若者がつれだつてやってきた。ここは一番、ウマとり術の腕だめしと心はやる若者たちである。彼らはウマを横一線にならべて近づいてくる。決して縦にはならびない。縦は競走を意味している。横一線がモンゴル式の隊列なのだ。どの男も右手にオールガ（ウマとり棹）をもつ。長さ三メートルもの棹を小脇にかかえる。ちよつと斜めに騎乗する姿は、誰もが凜々しい。凜々しさが横一列にならんでせまる。

到着した男たちは、まずオールガを地面に横たえる。ウマをつなぐ。長さ十メートルほどの繫索用の綱が、たちまちウマでいっぱいになった。ウマは綱をみだし、人はゲルをみたす。ゲルにいる男たちは、塩味の乳茶のみながら、ことは少なにときをまつ。ゲルからあふれた男たちは、円陣をくみ大地にすわりこんでときをまつ。つどつた男はざつと七十人。半径十五キロメートル以内の、老人をのぞくすべての男たちがあつまつたといつても過言ではない。

鞍のついたウマがおよそ百頭をこえたころ、馬群が目前に誘導されてきた。黄土色の大地に、茶褐色の馬群。砂けむりがまう。青い空も黄色にそまる。正午。いよいよ、はじまる。

ドドドドゥッ。目のまえをウマたちが疾駆する。追われているのだ。馬群からちぎれた数頭のウマがはしりさる。そのうちの一头をつかまえようと、オールガをもつた男が追っている。しかし、そう簡単につかまるものではない。自由に草をはんでいるウマは、そうやすやすとはつかまらない。追われたウマたちが近づいてきたら、とにかく大声をあげるべし。それが、わが身の安全をまもる唯一の手段。「ホイイ」とか「オーイ」とか。かけ声はなんでもよい。声をはりあげれば、ウマのほうからさけてとおってくれるはず。またきた。叫べ！「オウッ」、駆けぬける、ドドドゥッ。大地が揺れていた。

追われているウマたちはどんどんちぎれていき、最後には、めざす一头と追う一头の一騎打ち。遠景に、そんな一騎打ちが点在していた。オールガが前方にのびる。棹のさきについた輪が、ウマの首をと



ウマ追い

らえる。輪にとらえられてもなお疾駆しつづけるウマ。そのウマを確実にとらえてはなさないのが追走馬。ウマからずりおちそうになってもなおお落馬せずに棹をひく男の姿がみえる。ウルジーチンゲルその人だ。すでに衣のすそは地面をこすっている。これぞまさしく人馬一体。そんなかれをみて、エルデニ姉さんが嬉しそうに、

「やー、ガンザガしてるね」

といった。ガンザガとは、鞍にたれさがった、荷物をむすぶための革紐である。馬上の人の衣が、そしてひいては人そのものが、まるでガンザガのように鞍にぶらさがっているという比喩表現。

つかまえたウマが疲れをみせると、たてがみを切る人がよばれる。ハサミをもった男がかけてくれる。調教ずみのウマには、チョドルとよばれる足かせをはめ、ノクトとよばれるおもがいをつけて静止させる。そして、たてがみと尾の房を丹念に切る。ハサミをもった男は、ウマの尻にある烙印をかならず確認する。切った毛を正しく所有者の袋にいれるためである。用意されたいくつかの麻

袋がしだいにウマの毛でみちていった。未調教のウマなら、ハサミをもった男のほかに、力持ちの若者もよぶ。およびのかかった若者は、ゴホルとよばれる両耳のあいだの長い毛とモンダーとよばれる胸のあたりの長い毛とを両手でつかんで、ウマを横だおしにする。あるいはまた、尾をつかんでひきたおす。こうしたウマは、たいていまだ烙印もない。そこで烙印をおす。まっかにやけた鉄の棒をかかげた人が、騎乗してはしりよる。ウマの尻にジュッと一息。獣毛のこげるにおいがかすかにただよって、空に消えた。

ウマを追い、とらえ、走りぬく。あるいはまた、ウマをたおす。それは、男たちにとって「わざ」と「ちから」との競い合いである。馬術競技に、格闘技。これは一種のスポーツ・フェスティバル。しかし、だからといって七十人もの男たちが自由勝手にウマを追いかけ回しては、作業にならない。捕捉、剪毛、烙印という一連の作業を指揮するこの日の総監督は、いうまでもなく、この日で馬人をやるウルジーチンゲル。かれは何度も声をはりあげなければならなかった。

「つぎは栗毛のメスウマを追ってくれ」

「それじゃないよー、背高のほうだ」

と捕捉すべきウマを毛色などで指示する。

「おーい、こつちを切ってくれ」

「むこうでまってるよ、烙印して……」

まだ烙印のついていない子ウマにいたるまで、すべてのウマの所有関係を正確に把握しているのは、かれをおいてほかにない。特別の理由があって、毛を切らないウマもいる。たとえば、ある人が亡き父の形見としている去勢ウマ、ある家が当地の山の主にささげているメスウマなどなど。そういう事情をすべて心得ているのもかれである。男たちはかれの指示をまっけてウマを追うのだった。



まだ人に慣れていないウマとの格闘

ひとたび指示の声がかかると、だれかがただちに加速する。名のりをあげることもしないで。だれかが追跡をはじめれば、よってたかって追うこととはない。そこには暗黙のルールがあるようだった。ダッダッダダダ。加速するひづめの音。加速をはじめその瞬間に、男の顔から笑みがきえる。険しい目でめざすウマをみつめる。目のかがやきもまた加速する。

脇役に徹した男たちもいる。ハサミをもち、たてがみを切る係。烙印の鉄棒をやく係。おおよそ五十歳前後の男たちが、そうした役割をかってきた。まだ四十三歳のシャグダルもそんな一人である。彼は、ウルジーチングルの妻の、母かたのおじにあたる。種オス一頭をふくむ二十三頭のウマをもっている。かれはこの日、朝早くやってきて裏方にまわるともうしでた。若いころウマとりの名手だったかれ。それだけに何度も落馬したし、ケガもした。もう落馬にはこりたらしい。

「若いものにまかすさ。いまはもう心臓がおよばないんだ」

決して息切れがするという意味ではない。心臓で、勇気が表現されるのである。もはや勇気をうしなつたと述懐したこの人が、昨年妻をうしない、まだ幼い子どもを三人もかかえていると知つたのはそれからずつとあとのことだった。のこされた子どもたちのことを思えば、もはや危険なまねはできない。落馬などしてはならない。子どもたちのために、オールガをあきらめたのかもしれない。

オールガをもつた男たちのなかで、一番の名手はだれか。噂によれば、ウルジーチンゲルその人だという。しかし、かれ自身はつましくかたる。

「わたしはそれほどよくはないけどね。それでも何年も馬人をやつてきたでしよ。わたしより、わたしのウマがよい。だからウマが棹を放置させてくれないんだ」

ウマとりの名手にはウマとりの名馬がいたのである。追走を得意とするウマは、棹にちなんで「オールガ・モリ」すなわち「ウマとり棹・ウマ」とよばれる。ウルジーチンゲルには三頭のオールガ・モリがあつた。そして、この日一日で三頭をつぎつぎとのかえた。最初にのつた栗毛のウマは、新たに馬人となる男にあたえた。つぎにのつた十歳馬は「緑」とよばれる毛色をしている。彼がみずから調教した愛馬である。最後にのつた赤毛の八歳馬もまたかれが調教した。六百キロメートルはなれた西方から干害をさけて当地に放牧にきていた人たちが、いよいよ故郷にかえるとき、別れの記念と感謝のしるしに、一頭の二歳馬をかれにのこした。それをかれがしこんだのである。名馬ゆえに、と名手はいう。しかし、その名馬を育てた人こそ名手にほかならない。名手のもとに名馬あり。名馬の鞍に名手あり。

脇役と名馬にたすけられて、男たちがウマを追いまわす。追えば追うほど馬群は分散してしまふ。こうしてちりぢりになつたウマたちを、ふたたび集合させなければならぬ。作業をしている舞台の中央へと馬群をつれもどさなければならぬ。群れを追いまわすいっぽうで、群れをまとめる必要がある。ウマを一頭ずつつかまえるという派手なブレイのかげには、馬群をあつめるといふ地味な作業が必要な

のである。周辺をパトロールして、中央部へ群れをおしもどすという仕事。めだたないが、なくてはならないその仕事を、誠実にこなしたのは十二歳の少女であった。サランツエツクすなわち「月の花」というごく平凡な名前の彼女は、しごく平凡に六歳からウマにのっている。この日ウマにのつてはたらいっていた唯一の女性である。そもそもウマをあつめる作業は、子どもと老人の役割である。しかし、男の子たちは鞍をならべて競走したり、遊びに夢中だし、老人たちは、若者たちの派手なプレイをひたすら観戦している。黙々と、ひたすら群れをあつめた彼女。満でいえばまだ十歳の彼女が、この日の最年少者でもあった。

ウマにのつていた女性はサランツエツク一人だけれども、この日をささえた女性は何人もいる。妻サラントヤーは、朝から晩まで接客につとめた。七十人も男たちに茶を供し、食を供し、酒を献じるのは容易なことではない。彼女の妹は子守りをするためにやってきた。モージ母さんは、接客のための乳茶を一日じゅうわかしていた。エルデニ姉さんもセルゲレンも、別棟の台所とゲルとのあいだを幾度も往復した。おまつり気分の男たちをささえていたのは、やはり女たち。母いわく、

「みんな疲れただろうけど、私たちのほうが大変だよ」

たてがみ切りの作業がおわり、ゲスト全員が羊肉うどんを食べおわったころ、あたりはもうすっかり暗くなっていた。人びとは、酒のためにすこし赤みをおびた頬のままウマにのり、それぞれの家路をいそぐ。調教ずみのウマをあしたからの騎乗用にひいていく人もいる。これから調教するウマをつれていく人もいる。すでに馬群の大半はもとの牧地へむかった。分割されることになっている馬群もそれぞれ持ち主がつれさった。酔っぱらいの醜態もなく、宴がおわろうとしている。

案の定、何人かが落馬したが、大事にはいたらずにすんだ。かすり傷の数だけ男たちの誇りがある。それをだれも口にしないまま、一人、また一人とかえっていった。最後に一人、酒杯をかさねるウジチ

「ヤは、いつになく饒舌だ。」

「ウマを売ったわけじゃないから……。いつかまた馬人にもどるかもしれないけど……」

などと、歯切れがわるい。すこしばかりの感傷を人はめめしいというかもしれない。それでも、
する人は、雄々しい。この日いちばん雄々しくみえたのは、やっぱりウルジーチンゲルである。
挑戦